

# 晩年の義門

多屋 頼 俊

## 一

昭和二年の夏、小濱の妙玄寺に二十餘日滞在して、義門の著作お筆寫したり、傳記資料お探したりしたことがあつたが、その時、幸にも義門の孫に當る二人の老婦人に面會することができて、義門に關する話いろいろと聞くことができた。二人の老婦人の一人は、義門の嫡男逢傳（法名わ法傳であるが、普通わ逢傳と書）の長女で、中井の西廣寺に嫁していた小谷をみな刀目、一人は義門の長女瑟枝の長女で、高濱の西恩寺に嫁していた堀尾あん刀目である。その時の話の一つ、

7 (多屋)

義門さんね、亡くなる年の春から夏にかけて、四國から中國えの大旅行おしなはつたが、途中で重い病氣になつて、やつと京都まで歸つて來て、京都でわ福井近

江守とゆう大先生にみてもろうたけれど、もう、とてもなおる見込わな、とゆうことでした。それで小濱から身内の者が迎えに行きましたけれど、義門さんね、いま手お着けている本ができあがるまでわ歸らん、と言うて、どうしても歸ろうとわ言いはならなんだ。それお無理に——もう歩くこともできんようになつてしまったので——つり臺に乗せて、つれて歸りましたのや。歸つてからわ、つれて歸つてもろうた事お、喜びなはつたそうやけど。そして小濱の寺え歸つて、一週間目に死になはつた。

これわ、二人の婦人から殆ど同じように聞いた話である。ところで、義門がそのような重病の中で、是非ともこれだけわ、と言つて完成お急いでいた本わ、何とゆう本であつたのか、どんな内容のものであつたのか、それ

わ完成したのか、しなかつたのか、とゆうと、そうゆう事わ全く分らないのであつた。右の四國中國えの旅行の記「袖濡の日記」わ、天保十四年六月二十四日に大阪に着き、二十九日になお大阪で靜養していることお書いて、それで終つてゐる事わ周知の通りである。逢傳の書いた「釋義門傳」や「妙玄寺歴世系譜」お見ても、右の疑問にわ答えてくれない。

昭和三年の夏、再度若狹へ行つて、義門の門下や親類の寺々お廻つた(この時に「活語指南」の自筆稿本や「男信」の稿本の斷簡お見付けた)が、この時、瑟枝の嫁入り先の早瀬の淨妙寺にも義門自筆の「比巴の緒の言葉」が襲藏せられていた事お知つた。しかもその裏に昇道(瑟枝の夫。堀尾の父。より)京へのぼりつきしに、

此義門師……七月の初に(中國より)京へのぼりつきしに、追々病氣重り、福井の治療を頼みけり。予、外ならぬ身なれば、七月十七日立二而、見まひにのぼり、介抱しけるに、快腹(イデ)の氣ミへず。よりて八月五日立二而、予はからひ、心に叶はず乍ら、谷道をつり臺にのせて、ともなひ歸にけるが、日毎にたのみすくなくミへたまひ、つひに十五日巳の尅斗りに、往生の本意をとげ玉ひけり……淨妙現住、釋昇道(註)

と記るされてゐた。「心に叶はず乍ら」わ、義門の意志

にわ背きながら、の意味で、老婦人の話わ事實であつたこと、そして強いてつれて歸ることにした。その責任者わ婿の昇道であつた事お確めることができたが、義門が何故、歸國しようとしなかつたのかわ、やはり明にする事ができないのであつた。

一歩退いて考えてみると、この天保十四年の旅行わ、當時の義門の健康から見ると、無理であつたのである。

結果的に言へば、明にこの旅行が義門の命お縮めたように見える。義門わ元來、蒲柳の質であつたが、この旅行の二年前、天保十二年五月、瑟枝に與えた手紙(註三)の端書に「此手紙、くるく／＼とまきすてず、をりく／＼取出し可被見候。しかし、わが死なぬ内は、ほんまにはがてんゆくまい。父母のありてをしへしことのははなき跡にこそおもひ出ぬれのならひなり。わが近きうちに死して後も、とり出しみられよ。」

と記してある。五十六歳の義門わ、もう餘命が長くないことお豫感してゐた如くである。袖濡の日記の初に、

白峰に有と聞ける法寶の、いとく／＼ゆかしき、又吉備津宮宮内にして、藤井高尙翁の古今集新釋のいととりしらべまほしき、又姫路にて、川越・前橋のふるきよの事につきて聞合せまほしき、かうやうの事、そこ此

處にあればとて、われ、去年の秋より、聊はらのとのひかぬる恐れみあなれど、さは、それ、いみじくなやまざらんあひだにを(とて二月十八日に出發す)

とある。昨秋の病氣がなおつたから旅に出る、とゆうのでわなくて、重くなつて動けなくならない先に行く、とゆうのである。義門わその病がなおりにくい事お承知して、病お押して無理に出かけたものの如くである。それでわ、何故そのように無理おして、危険お冒して旅に出たのであろうか。袖濡の日記にわ、右に引用したように旅行の目的が記るしてある。即ち(一)讃岐の白峰宮にあると聞いている古寫本が見たい。(二)岡山の宮内へ行つて、亡き師匠藤井高尙の遺稿整理に参加したい。(三)姫路城へ参つて妙玄尼公のことについて尋ねたい、と。然しいずれも、生命の危険お冒してまで行かなければならない、とゆう程のこととも思われない。しかも日記お見ると、岡山よりも西の倉敷、長尾(いま玉島市中)、笠岡までも行つて、多くの日お費している(三月廿六日から五月六日まで)。これわ日記の初に記るされている旅行目的の範囲にわ入らない事である。ここで袖濡の日記の性質について一言しておく必要があるように思う。義門にわ「磯清水」と「蹤問の日記」と「袖濡の日記」と三つの日記があるが、磯清水と

袖濡の日記わ、いわゆる雅文で書かれている。これわ備忘等のために日々に書きつける實用の日記とわ違つて、文藝作品としての意識お以つて、人に見せるために、後に書き改めたものである(蹤問の日記にも雅文に改めたものがある)。従つて袖濡の日記わ、傳記資料としてわ最高のものでわないのであつて、いま私の採り上げている問題に直接答えてくれないのも、そのためであらうと考えられる。

## 二

義門わ、周知の如く、二十歳頃から國語の研究に志し、命終に至るまで一筋に研究お進めて來たのであつた。著作わ文化五年、二十三歳の頃に、後の「男信」の第一稿本「撥韻假字考」お書き、文化七年に「話語指南」の第一稿本「こと葉の追しるべ」お書き、爾後、活用、てにをは、假名遣等の研究お續けたのであつた。その中で公刊したものわ、文政六年、三十八歳の時に出した「友鏡」が最も早く、次わ天保四年(四十歳)に出したと推定せられる「和語説略圖」である。略圖及び友鏡が、國語學史上重要な地位お占める立派な著作であることわ、今更言うにも及ばないが、然し、何分にもこれわ片々たる一枚刷の圖表に過ぎない。

義門が書物らしい書物を出したのわ、天保七年(五十  
一歳)刊行の「山口栞」三卷である。次いで「活語雜話」の初篇、二篇、三篇お、天保十年、十一年、十三年に刊行し同じく十三年に「男信」三卷お刊行した。こうして義門わ五十歳お越えてから、次々と著作お刊行したのである。

「天保十四年癸卯八月」と刊記のある「指出廻磯・磯の洲崎」わ、義門の命終直前くらいに本になつたと思われるが、「和語説略圖」の壬寅補正の本わ歿後に刊行せられたのかも知れない。「話語指南」わ翌天保十五年の正月に刊行せられ、「玉緒線分」(五冊)わ、ずつと遅れて嘉永四年辛亥春に刊行せられたのであつた。

その後、眞宗聖教和語説(五卷、内第一卷、改邪鈔遠測、唯信鈔講説、宗名御文講義、尊號眞像銘文講説、末代無智御文和語説等の講義の筆記わ、大正年間に活版で刊行せられ、次いで活語餘論三卷も活字で刊行せられた。

現在、未刊のままで残っているのわ、於手輕重義、活語餘論の卷四、五、六。友鏡底の影料、類聚雅俗言等が主要なもので、その外に前記の日記等、若干のものがあ  
る。

妙玄寺わ、嘉永六年と安政五年と二度も火災に遇つて、

義門の遺稿等わ、みな焼けてしまつた。そのために、書名が傳つているだけで、轉寫本もないものが二三にして止まらない。或わ書名すらも傳わらない書物があるかも知れない。然し其わ問題外に置いて、右に記したところから見ると、義門が晩年に心血お注いでいたのは何であつたか、何故、無理な旅行おしたのか、とゆう事わやはり分らないのである。

### 三

昨昭和三十年の九月、學友三木幸信氏と一處に、岡山縣下え義門關係の資料お探しに行き、昔、義門が長らく滞在した玉島市長尾町の小野務の家(いまの小野久彦氏わ務の曾孫に當られるよううで)お訪ねた時——(これわ昭和二十七年三月、福井大學の岡田正世氏から、小野さんの所にわ、必ずや義門關係の資料があるだろうと指示せられたので、訪問したのである)——義門の懷紙や短冊の外に、義門から小野務に宛てた書簡等十九通、逢傳の書簡三通、關政方の書簡等十二通等お見せてもらうことができた。その中で、義門が長尾お立つて、倉敷、宮内お經て姫路まで来て、六月朔日付に書いた書簡わ、義門傳資料として特に貴重なものであつた。この料紙わ粗末な巻紙で、縦四寸八分五厘、横九尺二分。細字で一面に記るされていて、四百字詰原稿用紙に寫すと八枚弱

になる。先ず左にその要點お摘記しよう(……わ省略した部分 括弧内の細字わ私の補筆、本文の訓點わ私が補つたもの。□の中へ書いた害等で讀めない部分。判讀できるものわ□の中に書いた。)

……廿二日 姫路着後、日々快方、就中廿四日ニ申達候

處、彌明後三日に當城中卽是堂と申□ 妙玄禪尼

合、酒井兩家之[元祖]之靈前へ焚香念經ニ罷出候

事ニ極マリ、就テ段々往昔之事なり、此旅之素[懷]一

満足ニ御座候。廿五日より、右待候[圖]、古今集講義、

夏部を濟し申候。七日比發足、十日比出坂、十八日頃

出京、廿日過歸寺と□ 申候……………

一上州より「活語指南」摺上ゲ見せに[來]處、落[圖]あ

りて不□備候へども序跋なども懸ニ御目ニ度候。却て

煩ニ御目ニ候事ナレドモ入ニ御一見ニ候……………(出板の)願も

江戸にて濟候由、御同喜可レ被レ下候……………七月□ 入迄

ニ、若州へ御かへし可レ被レ下候(貴下と水澤氏とで、分

けて御手許に残し置かれても苦しからず)……………

一「活語餘論」も新井守村、出板の事一言有レ之、此男

「活指」藏板セル上、「於乎輕重義」も追々藏板企度、

去年申越候仁也……………私も病氣<sup>モイロノ</sup>なく候ても、老衰故、骨

折置候著述ハ追々出し度候て、讃岐丸龜津坂ハ先日

「いそしみづ」藏板望企候も、喜敷奉存候事也。夫ニ

付、膝とも談合と申試、可レ申候。其御兩家様ニも、何

ゾ一ツ愚作の内、御引受御藏板御企被レ下間敷候哉……………

……「くりわけ」も勝村より達て願望に付、一昨冬[圖]

書立候。然處、昨年御主意御觸ニ付、書林株つづれ、

就ては勝村自分自在の利難レ取事ニなりしニ付、俄に變

心し、仍レ之、致かけ候ものゝ事故、私方藏板にとふり

をかへていたし居、其内、若州にて半分持望候もの有

レ之、残り半分ハ寺藏板の心組也。藏板いたし候時に、

如<sup>レ</sup>山口<sup>レ</sup>うれさへいたせば、借金して元入いたし置候

ても、勘定不<sup>レ</sup>惡、後々ハ寺の徳用と成候事乍、眼前さ

しくり、其元入金ニ當惑にて、一度ニドット兼ニ出銀<sup>ニ</sup>

候故、彫刻追々手間入、遲り申候が實事にて、口惜キ

次第ニ存居候也。

扱、「山口渠」ハ板下・彫刻・願・雜用、卅金近ク入

申候。「活指」ハ丁數少候へども、江戸ハ高直にて廿

五兩斗入申候由ニ御座候。「雜話」ハ大氏五百目より

六百目之間、三編少ヅ、不同御座候。凡ソ江戸彫ナレ

バ壹丁ニ付、彫と筆耕并雜用とも三朱位ニ付と承申候。

京板<sup>モイロノ</sup>アレドモ、凡一丁拾壹匁位とみれば、大氏の上々

彫リニ相成申候。ヤクザボリナレバ一丁八九匁ニテモ

出來[圖]へども「さしでのいそ」などは、京にても一

丁壹歩斗ニ付、江戸より高直ニつくをいとはず、大極

上々彫にせさせし事也。かくて皆刻出來之上、大氏ハ

壹冊ニ付、板ちんと申もの壹匁ヅ、はいかなる書林も

出し申候故、壹冊五六十紙ヅ、と見て、六十丁之元入

十兩入居候處が、百部うれ候へば壹兩御座候へば、一

割の金まはし置が如し。五十部かなしふのうれにて

も五朱ノ利マハリ也。如ニ山口、百何十とうれ候へば、

よき利廻しの如く、「消息文例」や「玉のを」の如く、

年々何百部とうれ候へば、「消息文例」の御かけにて、

河儀ハ大ニ喜と申位の事ニ御座候。右故、甚敷御損ニ

相成候事ハ恐ハ有之間敷候。一御思案可被下候。

如ニ前段ニ及ニ老衰候上、病身にては從來之著述、何と

ぞ見ニ板行候て、及ニ命終ニ度候へども、書林のかぶつ

ぶれより已來、書林引受ヲはづまず、又自力ニ寺銀追

かけく出し候事ハ迎も不叶、年々少ヅ、の出版、其

内には死亡いたせば、水の泡と相成申候處、著述も

活語餘論 八冊 其外 八冊 尙書立候ハバ何冊も可出來

類聚雅俗言 二冊

假名遣千よの古道 一冊

おを輕重義 二冊

やまと玉しひ 一冊

活語雜話四へんめ 壹冊

月くさ

一冊

右等之外

あととひのきに

江戸往來紀行

二冊

此度ノニテ 紀行

一冊

文集 伊マタシラベ

五六十丁ヅ、

凡ソ

三冊 ナルベシ

此外、内典のうへにて

内外胎教略など申も多し

しかし是ハイツマデモ寫傳ノツモリ也

……(右わ) 御しひ申の、御難題御頼申のと申事ニ非。

……御損ニも相成間敷、御慰ニも相成、又拙僧老後の

樂みを御させ被下候思召にてならば、御兩方様御相持

ニ、何ゾ一部也とも、又は夫々一部ヅ、也とも御引受

御藏板御企被下度奉存候。但右目錄之品々ハ御い

や、「くりわけ」ナラバの思召も御座候ハバ「くりわ

け」ハ五冊にて貳百卅丁斗也。物入大凡三十二、三兩な

らん、其内半分ハ引受人あり。其半分、如ニ前文拙寺

出銀ぐずつく故、彫刻延引、心外之事故、此半分ヲ御

引受被下候ハバ、春來ハ職人三人してホルモノヲ、十

人ニモカ、ラセ、月々ニ金ワタシサヘスレバ、職人喜

ビくサツく急々彫上ゲ候へバ、弘メ本、今秋中

ニも世界中へ出候様相成、可<sub>レ</sub>喜候也……呉々も御しひ申御頼申ニハ非。只々追かけ／＼出板いたし度内ニ死亡せんを恐<sub>レ</sub>て、一御相談申上候斗ニ御座候。

御兩家様とも、已上ハ叶<sub>ニ</sub>思召<sub>一</sub>候□、御否諾之御報御銘々ニ可<sub>ニ</sub>仰下<sub>一</sub>候。少も／＼御いやけ之事しひて御うけハ被<sub>レ</sub>下間敷候。私ハ只々一度ニ雜用入候藏板、力不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>くせに、著述書は勿論、文集・紀行もの迄も、存生中ニ出して見度内存より、かく迄及<sub>ニ</sub>御内語<sub>一</sub>のみ也  
一(新井守村関係の書き物) 御兩方様とも、無<sub>ニ</sub>御捨置<sub>一</sub>、はや／＼御覽之上、益前迄ニ若州へ御かへし可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候 以上

六月朔

クラシキ  
水澤様

ナガラ  
小野様

義門

この手紙に於いて、先ず注意せられるのわ、六月朔日以後の豫定である。六月十日頃に大阪へ行き、同十八日頃に京都へ、そしてすぐ歸國の途につき、六月二十日頃にわ小濱の寺へ歸ると言うている。この手紙のもう一つ前、五月六日に書いたかと推定せられる小野務宛のものにわ……宮内、明日より凡十日迄、赤穂へ十三日迄ニ、姫路へ十八日比迄ニ、大阪へ五月中ニ、直京二三日、國へ六月十日迄ニ、不<sub>レ</sub>至<sub>ニ</sub>極暑<sub>一</sub>内ト奉存候

と言っている。姫路でわ右の五月初旬の豫定より十日ほども遅れているようであるが、この十日程の遅れおそのまゝに、六月十日迄に歸國しようと言つていたのお、六月廿日頃に歸寺しようと言っているのである。ここでわ京都で何か大事な仕事おしよう、とゆうような事わ全く考えられていない。従つて七月の末、八月の初に、足腰も立たぬようになつて居りながら、これができ上るまでわ歸國しないと云ひ張つたのわ、その後に特殊な事情が生じたためであると見なければならぬ。

義門が姫路城え上つたのについて一言説明お加えておこう。姫路の藩侯酒井家の先祖酒井重忠と、小濱の藩侯酒井家の先祖酒井忠利わ兄弟で、父わ酒井正親、母わ法名お妙玄と言つた。義門の住坊妙玄寺わこの妙玄尼の菩提寺である。ところで從來わこの妙玄尼わ正親の側室として取扱われていたが、義門が苦心調査の結果、側室でわなくて繼室であつたことが明になつたのである。これわ小濱・姫路兩侯にとつて喜ばしい事であり、義門わ菩提寺の住職として、また調査の責任者として、姫路侯にも報告する必要があつたのである（袖濡の日記に「川越前とあるのわ、小濱侯わ小濱に封ぜられる前わ川越の城主で……妙玄寺も川越に在つたのである。前橋も古い縁故の地である」）。ところで、この長い手紙の中心わ、著作の出版につい

て援助お請うことにある。義門わくり返して、決して強いてお願いするのでもない、と言うているけれど、この手紙全體の上に流れているものわ、無理にお願いするのでもない、とゆう言葉お越えて、一種悲愴な強い力で訴えているものが感ぜられる。義門わ長尾お出發して後、小野務に宛てて四月二十三日附、二十八日附、五月六日(？)附の手紙お出しているが、著述出版について援助お依頼しているのわ、六月朔のが初である。しかもその書きぶりお見ると「活語指南」の事お書きつけたあたりから文勢が一變して、決河の勢とでも言おうか、今まで抑えに抑えていた事お一氣に言い盡しているように感ぜられる。この書きぶりから見ても、義門わ長尾滞在中にこのことお務に依頼したかつたのであるが、何故か言いそびれて、ついに言わずに別れてしまった。そして倉敷、宮内お經、姫路まで来て、もう旅も終りに近ずいた、そして活語指南の事お書き出したところ、つい、かねて心の底で思っていた事が一氣に出てしまつたのであるように感ぜられる。そしてこの事が實わこの旅行の全體にも關係のあつた事でわなかつたかと思われるのである。

義門わ、先に記したように、天保七年(五二)から十三年(五七)までの間に、山口栞と男信と活語雜誌と三部九

冊お公にしているが、右の手紙によつて、これわ凡て自費出版で、このために八十兩—九十兩の資金お投じていたことが知られた。なるほど刊本お見ると、これらわ皆「白雲城下白雪樓藏板」とある。白雲城わ小濱城、白雪樓わ義門の樓號である。昨秋、義門の曾孫である妙玄寺住職東條義山君に、この手紙のことお話したところ「義門さんわ、どうしてその金お工面したのだろう。寺にわそんな金があるはずわないのだが」と首お傾けて居られた。恐らくそこに義門の人知れぬ苦勞があつたのであらう。尤も山口栞のように百何十部も賣れたものわ、元金の上になお何程かの利益も加つて歸つても來たであらう。そして義門わ、出版おすれば、元金お回收するくらい。その事わできるとゆう自信お有つていたようである。然しそれにわ時間がかゝる。義門わ餘命いくばくもない事お、かねて覺悟している。しかも出版したい本わ十指に餘つてゐるのである。

この手紙お書いた頃にわ「指出の磯・磯の洲崎」の板本がほゞ出來上つていた(これも自費出版)。なお「和語説略圖」の増補板の仕事も進めていたことわ、袖濡の日記の六月二十八日の條に明であり、玉緒續分についてわ前記の如くである。



一方、上野の新井守村わ、先に「活語指南」の出版を引受けてくれて、まだ出版わしないが、二年前に一應板本も完成していた。そして更に「於平輕重義」や「活語餘論」の出版も引受けようと申出ている、と右の手紙に書いてある。然し義門わ守村とわまだ面會したこともないので、そうく好意に甘んずるわけにもゆきかねるものがあつたのであろう。そこで新井守村の如き後援者お更に他に見出したい、とゆうのが義門の念願であつたようである。この手紙から見ると、義門わ出版について確に、あ、せ、つ、て、いる。またこれだけ多數の著作お短期間に出版しようとすれば、あせらざるお得なかつたであらう。

長尾の小野務、倉敷の水澤定穀わ、當時備中に於ける屈指の富豪であつた。小野務わ和歌に志し、門弟もあつた。そして家集お出したい希望お有ち、その方面で義門の指導お仰いでいたのである。袖濡の日記にわ、三月二十六日の條に「長尾のさとに小野務がり至れば、あるじはさら也、皆むつまじげにて、初めてのやうにはおもはれず」とある。昨秋、小野家で見せてもらつた書簡の中でわ、三月二十四日附で、務の二月五日附の手紙に答えたものが最も時日の早いものと見受けられた。その手紙にわ「……奈万之奈三冊出來申候、雜誌三篇ハ四月ニハ可

レ及ニ發行ニ候……」等とあるから前年の天保十三年三月の<sup>レ</sup>ものである。又この中に「……山口栗も十三匁定メニ藏板之手前ニハいたし御座候、定て夫より高料ニ御調へ也けん……」等と六年も前に出版した書物の頒布價格お言うたり、また藤井高尙翁<sup>天保十一年歿</sup>の遺稿整理のために「一度はかの吉備津宮に物してと、年々存候事、然處、幸哉、貴家へ斯申承候事出來候故、御國へ向候ニ大得<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>據候心地、樂ミ一入ニ成候……」とも言っているから、義門と務との文通わ天保十三年の春に始まつたものの如く、面會したのわ、十四年三月が始である。<sup>(正九)</sup>水澤氏との交際わ、或わこの旅行に始まつたのか、とも思われる。日記によると、水澤方に約二十日滞在して<sup>(但し數日わ病氣のため静養この間、金川の難波立)</sup>和語說略圖、詞の八衢、詞の玉の愿方に二泊している。緒、山口栗などの要點お講釋している。五月六日の條に、定穀わ「活語指南」の寫本お見て、非常に喜び、終日これお讀んでいて、和語說略圖お一層よく解るように<sup>八ちまた</sup>山口栗<sup>全圖</sup>とでも言うべきものお書いてみようと言ひ出したとある。前記六月朔の手紙に「水澤君へハ先日御催し之全圖、彌御書立を御すゝめ申度」とある。定穀の方が務よりも國語學的興味お深く有つていたのかと思われる。

もう一人、「磯清水」の出板お引受けてくれたとゆう丸龜の津坂瑞臣のことわ、妙玄寺にある「磯清水」の跋に、

此讀岐なる白峰寺に、佛經ミホトグミカウシヤサの寫本あり。そを見て考まほしきことのありとて、義門大徳ダイトコ、若狹國よりはるくくとぶらひ來て、我家にとゞまり給ひける折しも、此城のあたりちかき光明庵といへる庵のほとりに、しかんゝとかたりつれば、さりや、といたうよろこびつゝ、やがてそこに行きて

與謝の海の橋立のより哥所はこれの讀岐の磯堀の水となんよませ給へるをきゝて、さては丹後にも此類ひありやととへば、しかりといらへながら、磯清水とうはぶみしたる一とぢの巻をとりいでゝみせ給ひけるをみれば、松の屋の翁の筆加えられたるまゝになん有ける。此とち巻は、文政の初め津の國の何某にみせられるに、其人東にくだりけるが、終にかへり來ずなりけり、せんすべなき事とおもひ居られしを、あまたの年經て、天保二年といふ年の冬、東路にしてうつし得たる由にて、うちつぐる人のものがたりけるが、ふたゝび大徳の手に入ためるは、いとくすしき事なりけり。こをおもへば、またいかにしてかうせなん

ともはかりがたければ、あまのはしだてふみゝん人のために、かいほりの井の淺からぬ心ざしを世にしらせまほしくて、櫻木にちりばめるは、丸龜に仕ふる津坂の瑞臣。時は天保十四年三月

と、既に板に彫つてしまつたかのように書いてある。袖濡の日記によると、三月十四日に瑞臣を訪ねている。十五日の條に讃州府志に、法然上人が鹽飽島から讀岐に徙られる時、襪お以て海濱お掘られると清水が湧き出た。

これが磯堀井で丸龜城の西八町の處にある、とあるに依つて、これお見に行き、丹後の天の橋立にある磯清水と比較している。そして三月二十四日頃、いよゝ備中え渡ろうとする直前の所に、瑞臣が襪ほりの歌について質問したので「橋立日記を見す」とあり、次いで「橋立日記磯清水を、行簡、板にゑらせてんといふ。ともかくもと任せつ」とある。義門わその夜の舟で長尾え渡つていたのである(行簡わ瑞臣の通稱であらう)。それから五月五日の條に「圓龜(イデ)より行簡せうそこしけるやう、磯清水、いよゝゝあり板にものすと、いひおこせけるも心なぐさの一になん」とある。この日記の記述から見ると、瑞臣が出板お引受けるに至る過程わ、跋文に書かれているのとわかなり違つていたのでわないかと思われる。瑞臣の傳記わま

だ調べていないが、右の跋文に依れば丸龜の藩士であつたようであり、袖濡の日記の三月十四日の條に、瑞臣の母の還曆お祝つた義門の歌が記るされているから、瑞臣わ當時四十歳前後くらいであつたのでわなからうか。そして和歌に志して義門の教お受けていたようである。そして小野・水澤兩氏への出板についての依頼から推すと、或わ磯清水の出板も義門の方から話お出し、瑞臣わ暫時考慮の後に引受けたのであるかも知れない。

さて、義門がさし當り出板したいと言つて列舉した十餘部の中、「類聚雅俗言」と「おを輕重義」わ稿本が残つて居り、「此度ノニテ未名不定紀行 一冊」とあるのが、「袖濡の日記」であることわ改めて言うまでもない。「假名遣千世の古道」「やまと玉しひ」「月くさ」わ殘念ながら未だその稿本の寫しも見出されていない。結果的に言え、これわ義門の手紙にある通りに「水の泡」になつてしまつたようである。

「活語餘論」わ一二三の三卷だけが妙玄寺に傳えられていたが、昭和十二年に野田實氏が笠岡の久我家に傳えられていた六卷本お紹介せられた但しその前から卷の一わ缺けていた由であるが、いまこの書簡にわ八冊とある。但し天保十四年二月二十五日附の務宛義門の手紙その十八日に小濱お出發したので、この手紙わ京都で

書に活語餘論お務宛に送つた事お記るし

餘論壹六兩卷、入御覽置候間、拜顔迄ニ思召一盃御評御入置可被下候。壹よりとんで六なれど、壹ハ初故、第一希御評一度、六ハ御質問中之「から、からに」「物ゆゑ、ものゆゑに」「ゆゑ、ゆゑにの事アレバナリ。二三ノ兩卷ニハ備字例者ニ可謀事多分故、笠岡へ向ケ遣候。乍御邪魔、貴地より關氏へ御達し可被下候……但シ三ノ初ケ條ニ黃の御説も加へ置候故、是ハ御覽令爲成度も奉存候ニ付、笠岡より又復早速貴家へ御出し被申呉候様、立介丈へ申遣候……餘論二三の兩卷ハ被加評て、貴家迄出し置被呉ねば不都合之段、御申遣可被下候……

等と記してある。その追伸に「餘論……七八ハ中書いまだ」とあるのが注意せられる。この四國中國えの旅に出た時に、活語餘論の卷七・八わ草稿だけで、中書わまだ書いていなかったのである。なお右の引用の初「餘論壹六兩卷」の六の字の肩から右方え縁お引いて「但シ十二丁不足」と義門が書入れている。現在、笠岡市金浦の久我家に残つている、關政方舊藏の活語餘論わ、義門の歿後、青山茂春が筆寫して政方に送つたものであらうと推定せられているが、この本わ第五冊までわ各冊平均五十

枚ばかりであるのに、第一冊わ妙玄寺にあるものわ六〇枚 第六冊目だけわ三十六枚で、特に薄い、これわ義門が更に十二枚お加えて一冊にする豫定であつたものである。

「活語雑話」わ前記のように、初・二・三編わ既に刊行してしたのであるが、この書簡に「活語雑話 四へんめ 壹冊」とある。この雑話の第四編についてわ、右の二月二十五日附の手紙の中に

雑話四編も廿丁斗カラクシテ影本令書立候。是ニハ

第二ヶ條にへ之高按をのせ候事故、先急ギ入御覽候とあり「高按をのせ」の「の」から右え線お引いて「カキトリ文鉢御キニイラズハ、無御遠慮可ニ仰聞。御文鉢直シ候ナリ」と書入れてある。これわ活語餘論と一緒に務の所え送つたものである。四月三日の夜、笠岡で認めた務宛の手紙に「雑話四へント山口栗モ御し被下度候」とあるから、雑話第四篇が務の手元にあつた事わ明である。その前年の十月七日附の務宛の手紙に「雑話ハ三編迄、既行于世……四編五編追々出し申候」と言い、「四編序ハ伊藤出羽府内龍鳳山馨かけり。コレハ明春可ニ出版一二條補入」等とあるから、準備がよほど進んでいた事が知られる。同年十二月十日附の手紙にも雑話の「四編五編……」とある。從來わ新井守村が

「義門わ」活語雑話四編……に取掛居て死去候へば、是も

出来不申友鏡底の影と言つたのに依つて、活語雑話

第四編わ計畫だけで原稿わできていなかつたものと見られていたが、義門の右の手紙に依つて、活語雑話の四編

と五編、少くとも第四編の約半分わ小野務に送つたのであるから、今後発見せられる可能性がありそうにも思われ

る。小野久彦氏わ數年前、藏書の大部分お岡山大學え寄贈せられたが、或わ其の中に入つて居りわしないであらうか

「あとゝひのにき 二冊」わ前にも記したように、

現在妙玄寺にあるが、然しこれわいわゆる俗文の方である。義門が刊行したいと言つたわ、當然雅文に書き直

したものである筈である。そして雅文の蹤問日記わ、先

年大正九年小濱中學校長糟谷宗資氏が偶然反故の中から見出

されたが、それわ奉書紙十二枚のもので、江戸え着くま

での事お書いたものであつた。以上わ高島正氏から承た事

本お寫して惠投せられたものお珍藏している。私わ同氏が自ら一

冊しかできていなかつたのか明でない。文集「わ自ら」イ

マダシラベミズ」と言っているが、文集まで出版する豫

定であつた事わ今日から見れば、やゝ意外の感が無いで

もないが、一般に假名遣や文法お學ぶのわ、歌お詠み、

文お書きためと考えられ、義門も人の需めに應じて歌や

文お書いていたのであるから、文集お出そうと考えたのも、當時としてわ自然なことであつたのであらう。ともあれ、こゝに記るされたものわ、天保十四年六月一日現在に於ける出版計畫豫定であるが、この中に「友鏡底の影」「和讀語路轍」「語路轍生論」等が入つていないのわ何故であらうか、恐らくわ、これらわ原稿の作成になお相當の時間お要するものであつたために、ここにわ省略したのであらう。

さて右の手紙の中に「昨年、御主意御觸ニ付、書林の株つぶれ……」とあるが、これわ周知のように、天保十二年五月以降、幕府わ極端な緊縮政策お斷行して次々と嚴重な政令お發布したので、經濟界わ急激に不況に陥つたのであつた。更に天保十三年六月にわ、圖書の出版について嚴しい制限お加えて來た。尤もそれわ主として風教に害があると認められた繪本や草紙お對象としたものであつたが、倒産する者も出るほど、出版事業が不振になれば、賣行きの悪い國語學書などわ、商人から顧みられなくなるのわ自然のことであらう。けれどもこれわ晩年の義門個人にとつてわ、まことに不幸なことであつた。

義門の周圍お見ると、嫡子逢傳わ、いまだ年わずかに十五歳、もとより後事お托することわできない。小濱附近

にわ義門お師と仰ぐ少々の人わ居たけれども、義門の學お繼承してゆけるような人わ居なかつた。義門が「死亡いたせば」幾十年の苦心の結果が、空しく「水の泡と相成申候」べき事わ、明かなことである。餘命いくばくもない事お自覺している義門が、一冊でも多く出版しておきたいと焦慮するのわ、當然な事であつて、義門の手紙に一種悲愴なものが漂うているのわ、このためであると思われる。

ところで義門が出版の援助おしてくれと言うのわ、決して寄附おしてくれと言うのでわなく、金お貸してくれと言うのでもなく、「藏板」してくれと言うのである。藏板してもらふと言うのわ、出版權お凡てそちらえ委譲し、書物の賣上に依つて資金お回収してもらふのであつて、賣行がよければ、藏板者の利益になるのである。これお説明するために木板一丁の彫り賃から説明したのである。

#### 四

右の六月朔日の手紙の次わ、七月十二日附で京都から出したもので、これも粗末な卷紙(但し赤味のある茶色の紙)で、縦四寸八分、横二尺六寸八分のものである。

今日より殘暑ながら、殊外涼候へども、御安泰奉<sub>レ</sub>恭喜<sub>二</sub>候。

一姫路より呈上之書面、御覽被<sub>レ</sub>下候けん。其後、播州灘にて大變あしく、六月廿四日出坂。七月二日出京。一丁も不能<sub>二</sub>歩行<sub>一</sub>。駕通しにても道中可<sub>レ</sub>許に非と、福井近江守被<sub>レ</sub>申候間、八月迄眞敬寺にて實子法傳ヲ側ハナサズニ介抱させ候て、養生と淀おろし居申候間、御書狀ハ、京よしや町下立ウリ上ル眞敬寺迄御出し可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

一姫路より申上候事、高答奉<sub>レ</sub>待候、……

一さしで願御免。彫刻も成就。御同悦可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。但し職人ボン前ニハ仕立不<sub>レ</sub>具候間、ボン後早々進上可<sub>レ</sub>仕候。又貴家へハ可<sub>二</sub>進上<sub>一</sub>候へども、御社中等ニ買入人有<sub>レ</sub>之候ハ、御賣捌被<sub>レ</sub>下度候。凡幾部下シ可<sub>レ</sub>申候哉。御返事可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。むだニすりテハ御互ニアシク候故、御答承候上、何部とかきめ、御下し申度候、かつ、かんばん一枚さし上置候。玉しまかどこぞ書林だてるみせへ御かけさせ置可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

一此度のさしで何か評判宜く、うれしく候。就<sub>レ</sub>夫、數百部仕込、諸方へ下候へば、冬ハ金子の集り來べき事年、目前くりわけの彫刻も此節盛ニ渡し金入用、かたゝ

ニ困申候。可<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>候ハ、金子少々にても、當月より極月迄、御かし被<sub>レ</sub>下まじきや。尤<sub>レ</sub>乍<sub>二</sub>遠方<sub>一</sub>、何ぞ京にて御かはせ様の事御座候ハ、夫より受申度候。引當ニハ「山口栞」にても「なましな」にても山口ハ卅兩餘なましなハ直打急度御座候品、是を申置候間、京にて御所縁之家へ御引取被<sub>レ</sub>下候ハ、萬一冬、返金遅候之時、御押へ被<sub>レ</sub>下候へば、御損毛ハ立不<sub>レ</sub>申候。可<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>候ハ、十兩斗當月御引かへ被<sub>レ</sub>下候へば、大ニ忝奉<sub>レ</sub>存候……指かゝり仕込と彫刻とに當惑、勢失はんと仕候心外さに、一御相談申上候にて御座候。以上。

七月十二日

妙玄寺

義門

小野本太郎様

義門わ八月十五日に亡くなつたのであるから、これわその一ヶ月前に書いたものであり、義門の書簡としてわ、我々の知る範圍で最後のものである。この手紙によつて、義門わ七月二日に着京、上京の葭屋町下立賣上ル眞敬寺に滞在したこと、もはや一丁も歩くことができなくなり、駕に依つて歸國することも醫者が許さないので、當分眞敬寺で靜養と決心したことお知ることができる。逢傳わ二月に義門に従つて上京したので、袖濡の日記の

三月三日の條に「大内、物みにと法傳めて參る」とあり、五月五日の條義門わ倉敷に居た「みやこなる法傳、又眞敬寺よりの消息あり……」とあるから、義門が四國中國お旅する間、逢傳（眞敷寺）わ京都に留つて待つていたのである。そして今わ側お離れずに看護おしているのであるが、もう少年逢傳の手におえるような病氣でわない。前記のように、この十七日に長女瑟枝の婿の昇道が若狭お立つて看護に來たのであり、この時義門の次女の富尾も一處に來たのであつた。義門の病狀わ客觀的にわ既に決定的な段階に來ていたのである。義門わ最後まで意識わ明瞭であつた。そのために、一方でわ餘命いくばくも無いことお覺悟して居りながら、しかも「死」がそんなに身に近く迫つて居ると思わなかつたらしく、いろ／＼と仕事の計畫おしていたようである。然し病氣わ、實わもつと早くから、如何ともしがたくなつていたのでわないかと思われる。倉敷で病んだ時、當時備前備中備後に名のとどろいていた名醫、金川の難波立愿の治療お受けたが、立愿わ「抑ゝ此病は、くひもの・のみもののおきてこそ大じなれ。あながちに藥おほくのむべきにあらず。よねも何も心よりほりすることなきかぎりは、幾十日にても、しひてつとめはなくひ玉ひそ。天地のおのづからなる趣

きあるものにて、人毎にそれにさからひては宜しからず……」と言つたと袖濡の日記にあるが、小野氏の處に、この立愿から義門に宛てた手紙が残つていた。それは蟲害が悪い上に、私にわ讀みにくい字で、十分に讀み下すことができないのであるが、その中に

不<sub>レ</sub>苦候ハ、人乳ヲ<sub>□</sub>御上り被<sub>レ</sub>成候へば御<sub>□</sub>第一御通じ<sub>□</sub>よろしく候。しかし腥<sub>□</sub>大人は服がたく……………盃ニ一ツ二ツツ、ほど……

五月二日

立愿

妙玄寺様

とある。人乳お飲めと言うのわ、最後の方法であろうかと推測せられ、醫者わ既に匙お投げていたのでわないかとも思われる。

然し義門わ前に記した六月朔に姫路から出した手紙に對する返事お待ちわびている。思うに義門わ、あの手紙に七月二十日過に歸國すると書いたから、七月十二日の頃にわ務の返事わ小濱え向けて出されていたか、或わこれから書こうとしている、くらしい事であつたであらう。ところで、短篇の「指出の磯・磯の洲崎」わほど完成し、板下などお知つて居る知友の間にわ評判がいい。それにつけて「玉緒繰分」の彫板が遅々として進まない

のが、たまたま残念であつたのである。改めて言うまでもなく、義門わ廿歳の頃「言葉の玉の緒」の研究から國語の研究に入つたのである。そして天保二年に「玉緒繰分」の原稿お書き上げ、天保五年にこれお書き改め、天保十二年に三度稿お改めて、出版に着手したのであつた。それが前記の如き事情で、出版が遅れただけでなく、彫板が遅々として進まないものである。玉緒繰分わ今日から見ても立派な研究書で、義門の著作中の代表的なものであるが、それだけ、義門としてわ自信もあり、執着もあつたであらう。そこで義門わ遂に借金お申込んだのである。繰分の出版費わ三十二、三兩、その半分わ出資者がある。残り半分わ自分が出すことになつてゐるが、その工面がつかないので困つてゐるとゆう事わ六月朔日の手紙に記るされてゐた。ここで十兩の金があれば、出版についての話わ圓滿にまとまるのであつたのであらう。この借金の抵當としてわ、「山口栗」またわ「男信」の板木お差出す、と言うのである。

ここで、義門が旅行先で瀕死の病床に横たわりながら、この本ができるまでわ歸らぬと言ひ張つた、その本わ何であつたか、と考へてみると、其わ疑もなく「玉緒繰分」の出版であつたと思はれる。義門わ勿論、繰分が本にな

つてしまふまで、と言つたのでわなかつたであらう。義門わ務から十兩の金お借り受けて、この秋のうちに、遅くとも今年中に必ず出版するとゆう確約お、在京中に書肆との間に交わしたかつたのであらう。實際このような交渉わ、田舎え歸つてから手紙で交渉してゐてわラチのあかない事である。ところでこの依頼に對して、務わ何と答へたであらうか。假に義門の依頼お即時に無條件に聽入れたとしても、務の返事が義門の手に到達するのわ七月二十日過ぎになるであらう。それから義門が借用證お送つて、金お受取るのわ八月十日過にもなるであらう——これわ交渉が理想的に進んだ場合の假定であるが、義門の病氣お直接に看護した務が、義門の餘命の長くわないことお豫感してゐたとするならば、或わ簡單にわ引受けなかつたかも知れない——義門わ務からの援助お期待して、書肆と確約しようとしたようであるが、もう其お待つことが時間的に許されなくなつてしまつたのである。

## 五

袖濡の日記六月二十二日の條に「活語餘論一卷に補入をはりぬ」などと書いてある。義門わ旅行中にも著作の



修正などしていたのである。京都に着いてからも、病氣お押して執筆していたようである。袖濡の日記お我々が現在見る如き雅文體に書き改めたのも、恐らく京都滞在中の事であろう。伏見宮え奉つた「比巴の緒の言葉」及び妙玄寺、淨妙寺に残っているその下書わ、八月四日に認めたものであることわ、義門の奥書、昇道の裏書に依つて知られる。さて、次に掲げるのわ八月二十三日附で、逢傳但し代筆から小野務に送つたものである。

一筆啓上仕候。然て老父義門義、春來他行致し、貴地へ罷越候砌、萬々御世話ニ相成、生涯之大慶と喜悅申居られ候。就夫、存外其地ニ而發病致し、萬端御世話ニ相成、不叶レ自坊舎御介抱被下、食物等萬事御心配、御氣付被下、御深切之段物語承り、病中乍ら毎度申出し喜び申居られ候。且亦京着迄之處は、定而申上候ならん。於京都、福井近江守、深く醫術を廻し給ひ、八月五日迄在京致し、實子新發意并近親之僧侶、又娘、家來之者共罷登、於眞敬寺（一）腹藥養生致し居候へ共、藥功も見へ不申、追々肉脫致し、心細く所存候間、本人は歸國之所存も無之候へ共、介抱之者共相勸、漸く五日立ニ而四日道中ニ歸國致し候處、別段旅中之疲と申様子も相見へ不申候へ共、十五日終ニ落命仕、殘念

至極ニ被存候へ共、日本一之名醫ニ相懸り、此上醫療之盡様無之、無是事と落涙千行萬行ニ存候。後住私、漸く十五歳ニ罷成候風情而、誠ニ東西道を失、迷惑仕候。何れ生長之上、萬々御禮旁々貴地へ趣く時節も可有哉と存候。乍此上宜敷御頼申上候。此度ハ不取敢右死去致し候趣、一寸御報之一筆迄申上候而已ニ候。貴地夫々爲御知も可申上之諸家、可有之ならんと存候へ共、何分ニ東西道を失之風情而、御性名も不存知候。大世話に相成候方々も可有之候間、其御地夫々御便宜之方々ニ、乍御面倒宜敷御傳達被下度奉希上候。貴家へハ御返濟可申品も有之候へ共、右之擇柄故、後より委曲申上べく候。先は右之趣申上度、飽毫如斯ニ御座候

代筆御高免

八月廿三日

後住法傳拜

小野本太郎様

人々御中

萬事わ終つた、と言わなければならぬ。そして、本人わ歸國の意志が無かつた、とゆうことが、悲しくも胸に残る。それにしても、六月朔日附及び七月十二日附の義門の手紙に對して、小野務わ何と返事したのが氣に

なる。務からの返事わ實わ義門の生前に到着していたのである。然しその内容わ残念ながら分らない。この年の閏九月二十九日附逢傳から務え送つた手紙に

七月廿七日御認之御書狀、并八月二日之御書添之御報申上候。「活指」水澤より……………

一六月末比御認の御狀、七月廿日過到來、京都ニ而老父共々拜見仕候□□老父何と思けん、其儘持下られ候間、何れ御返上可<sub>レ</sub>申處存ニ候へ共、死失後大混雜ニ而大ニ延引、眞平御高免被<sub>レ</sub>下度候。何れ後より御返し可<sub>レ</sub>申上<sub>二</sub>候。今暫く延引ニ相成候段、眞平御高免被<sub>レ</sub>下度候。一さし出磯すを一部遺贈と爲、しん上仕候間御受納被<sub>レ</sub>下度候。誠に御地ニ罷出候節、御懇切御世話ニ相成候段、前世ニ云何成因縁有シニヤ、カ、ル御世話御心切之段□□日夜物語候、承り、御なつかしく嬉しく存奉候……………

閏月廿九日

妙玄寺後住

法傳拜

小野本太郎様

貴 酬

七月二十七日附の手紙わ、恐らく、義門の借金申込に對する返事であらうと思われるが、これについての務の意志わ我々にわ全く分らない。七月二十日過に義門の手に

届いた手紙わ、六月朔日の義門の手紙に對する返事であるが「何と思ひけん、其儘、持」返つたとゆう。それわ義門の希望に直に應じたものでわなかつたのであらう。それにしても「何れ御返上可<sub>レ</sub>申處存に候」とわ、どうゆう意味であらう。或わ、金一封が入つていたのでわなかつるか、そして逢傳わそれお返却すると言つているのでわなかつるか、と想像せられる。

さて玉緒繰分わ義門の歿後八年、嘉永四年に刊行せられたが、これわどのように話が進められて出版せられたのか未だ明にしていな。或わこれわ逢傳——父の晩年の病床に侍して、父の意志およく知つていた逢傳が、父の七回忌お期して刊行したのでわなかつるか、ひそかに想像する。逢傳わその後、明治十一年に眞宗聖教和語説の第一卷(三部經和語説第三)と題してある。また本稿に屢々引用した「袖濡の日記」の奥に

家大人自筆紀行。罹<sub>二</sub>嘉永六丑之災<sub>一</sub>。故乞<sub>二</sub>上州新居守村<sub>一</sub>。借<sub>二</sub>其所持之本<sub>一</sub>則移寫畢。自<sub>レ</sub>今以<sub>二</sub>斯本<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>原本<sub>一</sub>。永可<sub>二</sub>襲藏<sub>一</sub>。必勿<sub>二</sub>散失<sub>一</sub>。若有<sub>二</sub>借覽之人<sub>一</sub>。請<sub>二</sub>一見之後速返寄<sub>一</sub>焉。敢云爾。

嘉永七歲在攝提格三月下浣

と記している。「於乎輕重義」も眞敬寺にあつた本お借

りて寫したものである。この他にも逢傳が苦心して集めたものが相當にあるようである。逢傳わ國語學わ修めなかつたが、漢學者として、小濱でわ名の通つた人で、著作もある。これらの事お思い合わせると、玉緒繰分の刊行にわ逢傳が力お盡したのでわなかつたかと想像する次第である。ともあれ、繰分の出版に依つて、義門の最後の具體的念願わ達成せられた、と言ふことができるのであらう。

義門と務、義門と政方との關係についても若干記したいこともあるが、餘り長くなるから、それわ次の機會お待つことにする。

#### 附記

本稿わ、小野久彦氏所藏の義門・逢傳等の書簡お基礎にして書いたものであるが、これらの書簡類(義門筆十九點、關政方筆十二點、難波立願筆一點、法傳三點、外一點、計三十六點)わ、本年六月、小野久彦氏から大谷大學圖書館え寄贈せられた。

義門の傳記お論ずるのにわ、新井守村との關係に觸れなければならぬ。がこれについてわ、そのうちに岡田正世氏が發表せられる筈であるから、その御發表お待つて拙稿お修正したいと思う。

#### 註

一、この奥書わ拙稿「義門師の面影」(「東條義門」所收)に全文お掲げておいた。

#### 二、逢傳の「釋義門傳」

「妙玄寺屋世系譜」  
三、瑟枝わこの年の月に早瀬の淨妙寺昇道に嫁したので、義門わ瑟枝のために、眞宗寺院の坊主としての心得お懇々と書き記したものである。淨妙寺でわこの手紙お頗る大切にして居たのであつて、昇道が筆寫したものが幾通も淨妙寺にあつた。然るにその眞筆わ、昭和の初頃、牧野信之助氏(當時福井縣史編纂主任)の手に渡り、次いで吉澤博士の手に移り、現在わ三木幸信氏が珍藏して居られる。手紙の全文わ、昭和三年頃の大谷大學新聞に掲げたことがある。前記「義門師の面影」にも摘記しておいた。

四、於乎輕重義のいわゆる黒川本わ、黒川春村が白井寛蔭おして、新井守村の所に在つた義門の自筆本お寫させたのであり、その自筆本わ、高島正氏が守村の娘から譲り受けて、現に珍藏して居られる事わ周知の事であるが、義門の稿本がどうして守村の所へ行つたのか、とゆう理由お、自分わこの手紙に依つて知ることができた。

五、小野務についてわ、もう少し書きたい事もある。また小野久彦氏が中塚正齊氏に依嘱して「小野務家集」上下二卷お編纂せられ、昭和十三年に刊行して居られる。これわ和装五百八十餘頁の豪華なもので、この中に義門が批評お加えた務の歌「王寅詠草」一、二、三、四。柿園拾葉卷二などがあり、また務の「妙玄寺上人にきこえけるほとろぶ四段中二段兩活のさた」、義門の歿後に「門師のみもとに」と宛名して活語雜誌三編「せむすべなみ」について所見お述べた國語學の短い論文等注意すべきものがある。

六、野田實氏の「義門の活語餘論六卷本の發見」文學、昭和十二年二月號。